2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

| | |
|---|---|
| 研究課題 | **メディアをめぐる再帰的言説における信頼の構築**<br>**―報道の担い手の自己言及に焦点を当てた言説分析から―** |
| キーワード | ①メディア言説、②再帰性、③民主主義 |

**研究者の所属・氏名等**

| | |
|---|---|
| フリガナ<br>氏　名 | タナカ　アキラ<br>田中　瑛 |
| 配付時の所属先・職位等<br>（令和７年４月１日現在） | 実践女子大学　人間社会学部　専任講師 |
| 現在の所属先・職位等 | 実践女子大学　人間社会学部　専任講師 |
| プロフィール | 慶應義塾大学経済学部卒業（同メディア・コミュニケーション研究所研究生課程修了）。東京大学大学院学際情報学府博士課程修了。日本学術振興会特別研究員（DC1、社会学）、九州大学大学院芸術工学研究院学術研究員・助教を経て、現職。近著に『〈声なき声〉のジャーナリズム：マイノリティの声をいかに掬い上げるか』（2024 年、慶應義塾大学出版会）。 |

## 1. 研究の概要

本研究では、メディアの担い手による自らの職業や制度に対する自己言及を対象として、市民と送り手の間の再帰的なメディア言説の実践の可能性を検討する。伝統的なマスメディア論やジャーナリズム論では、客観的な事実を伝達し、公共的な議題を設定することで、世論を形成するという役割が専門職に対して期待されてきた。ところが、近代化が進行する過程で、その合理性も問い直されるようになり、メディアに限らず幅広い専門知に対する不信も蔓延している。このような状況において、メディアをめぐる信頼関係を再構築するために、従来の専門職にはいかなるコミュニケーションが求められるのかを明らかにすることを試みる。

## 2. 研究の動機、目的

これまでの研究においては、メディア・ジャーナリズム研究の文脈において、現代社会においてメディアの民主主義的実践が信頼を得るための条件を考察してきた。その上で壁となっているのは、ジャーナリズムにおける専門職イデオロギー（professional ideology）の硬直化であり、このことはエリート-対-大衆のようなポピュリズム的構造を後支えしてしまっている。送り手と受け手の間に境界線を引く従来のマス・コミュニケーションの構造が失われゆく中で、専門職が占有してきた正当性は問い直され、「ポスト真実」に象徴されるメディア不信を引き起こしてきた。こうした背景に対し、本研究では、メディアそのものの在り方を公共的な議題として設定する再帰的な言説実践が、既存のジャーナリズム理論を見直す上でどのような意義を持つのかを検証することを目的として設定した。

## 3. 研究の結果

本研究では、分析方法・対象の変更を経て、以下の問いに取り組んだ。第 1 に、メディアを取り巻く再帰的な言説実践を分析する上での理論的基礎を固めた。具体的には、ジャーナリズ

ムの専門職性を問い直すために必要な対話的環境とは何かを問い、再帰性とジャーナリズムを関連付けた。特に、リチャード・ローティの「リベラル・アイロニズム」やスコット・ラッシュの「美的再帰性」に着目し、論理的な仕方とは異なる感情的な結び付きや、公／私の分離を通した対話的実践の形成を通して、ジャーナリスト（専門職）自身も私的な側面を自己開示することで、その役割を絶えず問い直す必要性があることを指摘した。ここで得られた知見は、分担執筆者として参加し、2026 年度中に発刊予定の『ジャーナリズムの思想』（仮題）の一部として発表する。

第 2 に、障害学の観点からメディアの設計の在り方を問い直す必要性を論じた。ここで言う障害とは個人に対する社会的不利益の集中を指し、特定の標準的な身体や認知を暗黙裡に設定しメディア環境を設計するのではなく、利用者主権のメディア環境を生み出す必要性があることを指摘した。これは、利用者と設計者という立場を越えて、メディアの在り方を問い直す必要性を示唆するものであり、論文「メディア研究は障害とどのように向き合えるか」（『メディア研究』108 号）として公刊した。

第 3 に、専門職による自己言及を対象とした分析を行う当初の予定を変更し、メディアの再帰的言説の実践の一例として「#keep4o」運動をめぐるソーシャルメディア上の言説を分析した（新潟大学創生学部助教・水上拓哉氏との共同研究）。同運動は、言語生成モデル「ChatGPT」の一方的な仕様変更に抗する利用者主権の運動であり、専門家主導で推進されがちなメディア・プラットフォームの在り方を再帰的に問い直すものだった。この成果については、2026 年 6 月に開催された人工知能学会全国大会において研究発表を行った。

## 4. 研究者としてのこれからの展望

これからの研究においては、メディアの専門職イデオロギーと市民社会を対比的に論じるだけでなく、情報の送り手と受け手、メディアの設計者と利用者の垣根を越えた共創的実践がいかなる条件において可能であるのかを引き続き模索していきたい。現在は、特に民主主義的基盤としてのメディアそのものに附随する重要な問題として、再帰的近代の特徴である時間と空間の再編に関心を寄せている。メディア専門職が自分自身の課題や脆弱性を安心して開示し、従来のオーディエンスとともに乗り越えていく実践は、民主主義を持続的に発展させる上で必要不可欠なものであり、メディア・リテラシー教育やジャーナリズム教育の分野においても重要な知見をもたらすものである。

## 5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

本奨励金のような公共的な基盤に支援を寄せてくださる皆様のおかげで、主体的な問いのもとに研究活動が実施できることに対し、心より感謝申し上げます。メディアという一般市民にとって重要な社会基盤について、拙速な結論を出さず、時間をかけて考察を深めるためにも、こうした支援はとても心強く感じました。研究活動のみならず、教育活動や社会貢献活動においても、皆様の支えで得られた知を社会に還元していきたいと思います。



日本メディア学会2025年春季大会シンポジウムより